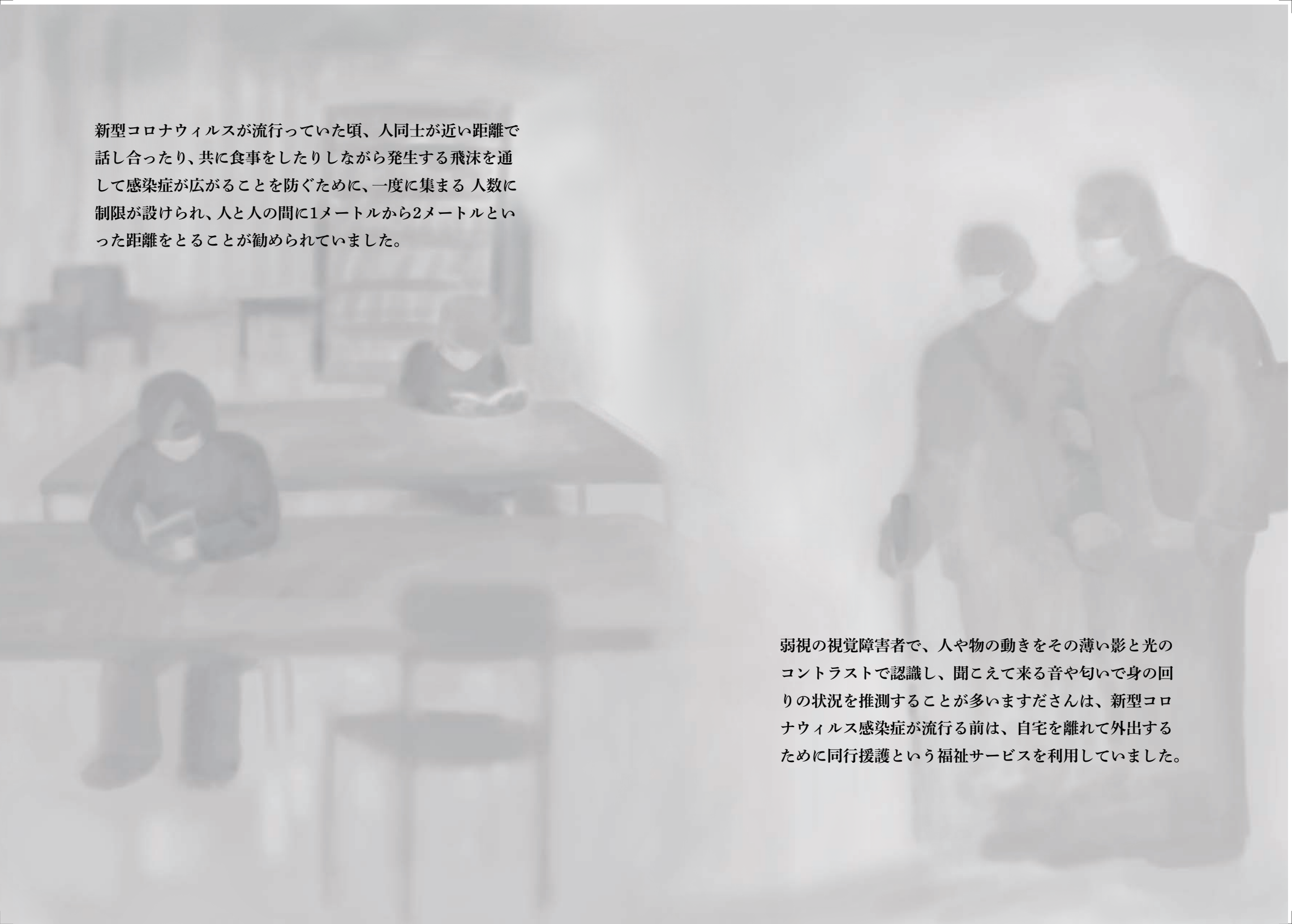


絵本『ますださん』をご覧くださいありがとうございます。
各ページの文章とイラストレーションは左から右の方向に流れます。

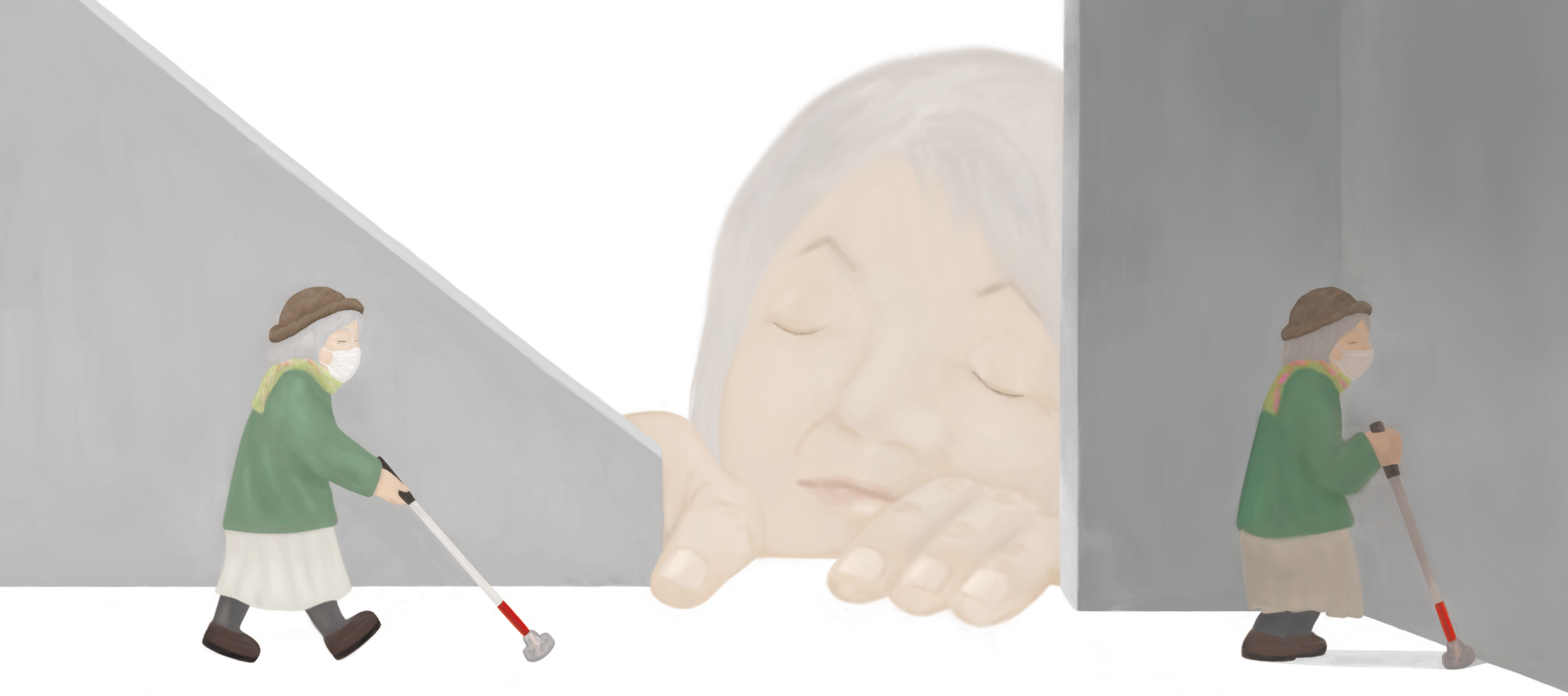
ますださん

Yewon KIM



新型コロナウイルスが流行っていた頃、人同士が近い距離で話し合ったり、共に食事をしたりしながら発生する飛沫を通して感染症が広がることを防ぐために、一度に集まる人数に制限が設けられ、人と人の間に1メートルから2メートルといった距離をとることが勧められていました。

弱視の視覚障害者で、人や物の動きをその薄い影と光のコントラストで認識し、聞こえて来る音や匂いで身の回りの状況を推測することが多いです。ださんは、新型コロナウイルス感染症が流行る前は、自宅を離れて外出するために同行援護という福祉サービスを利用していました。



同行援護は、視覚障害者と福祉サービス利用に関する契約を結んだ事業所側が提供する福祉サービスですが、コロナ禍では感染症を予防するために誰もがマスクを着用し、身体接触を減らしていたので、視覚障害者が同行援護サービスを利用しようとしても、事業所側でガイドヘルパーさんを送ることができないということがありました。

タンタンタン、新型コロナウイルスと迎えた最初の春は外出自粛要請がありました。外出を控えて福祉センターに遊びに行くこともしないで静かに過ごしていたますださんも、食材と日用品を買いに出かけなくてはいけなくなりましたが、同行援護がない状態で、一人歩きできるかが不安です。

そう、ますださんは、今までだったら自宅を出てから帰って来るまで、ますださんの目の代わりになって街に山積したあらゆる危険を見つけてくれる誰かと一緒に歩くことが当たり前だったのです。

今ますださんは一人で外出する前に、街を歩きながら遭遇し得る危険な状況をイメージしています。そうすると段々不安な気持ちが募ってきて、立ち塞がる壁を前にして長く深い影を目の前に落とされてしまっている感じがしました。



歩行時に使う白杖は様々にありますが、同行する人がいる場合は、視覚障害の人がいるということを見ても分かりやすく伝えるために用いることが多く、軽量で折りたたみ式の細い杖をガイドヘルパーさんの腕を掴んだ反対側の手で持ち歩きます。



一人で外出する時は、より頑丈な杖と接地面が広いチップを使って、安全な歩行をするための探索を行います。ガイドヘルパーさんがいる時よりも、杖を持つ手と腕を使い続けることになるのですから、体力的な大変さも伴います。

土曜日の朝、ますださんはガイドヘルパーさんの同行なしに一人で買い物をすることに決めました。

白杖で点字ブロックを叩く時は **タンタンタン**とメトロノームの針が拍を取る音がします。**タンタンタン**。歩いているうちにますださんは気持ちが落ち着いて来ると感じました。**タンタンタン**。白杖を伝って、ますださんの手の平に点字ブロックの凸凹や温かみや強度といったものが点々と届いています。そしてその都度、ますださんを導く淡い光がますださんの足元を照らし、ますださんは目の前が明るくなる感じがしました。

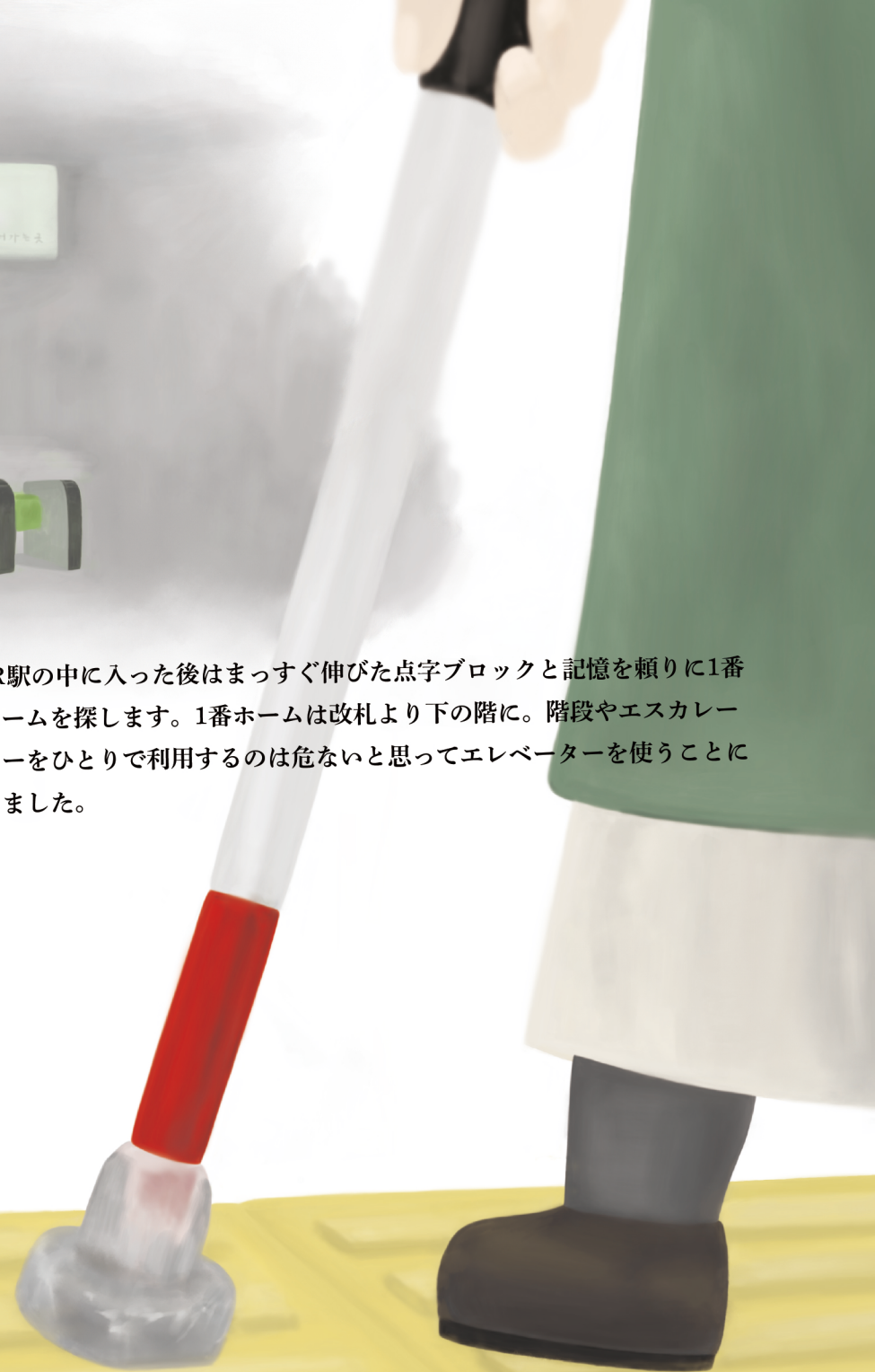
JR 淵野辺駅 Fuchinobe Station 入口 Entrance 入口



マスクとシャンプー、保存食を買うために、電車で一駅離れたショッピングモールまで行こうとしていたますださんは、いつもより物音が少なく、静かな駅の構内に佇みました。JR駅は閑散としています。

人々の流れが作り出す足の音、ピッピッと改札機にICカードをタッチする時の音の数々が少ないから「土曜日のはずなのに人がいない」とますださんは首を傾げました。そして改札機の方が分かるまでしばらく立ち止まります。

JR駅の中に入った後はまっすぐ伸びた点字ブロックと記憶を頼りに1番ホームを探します。1番ホームは改札より下の階に。階段やエスカレーターをひとりで利用するのは危ないと思ってエレベーターを使うことにしました。

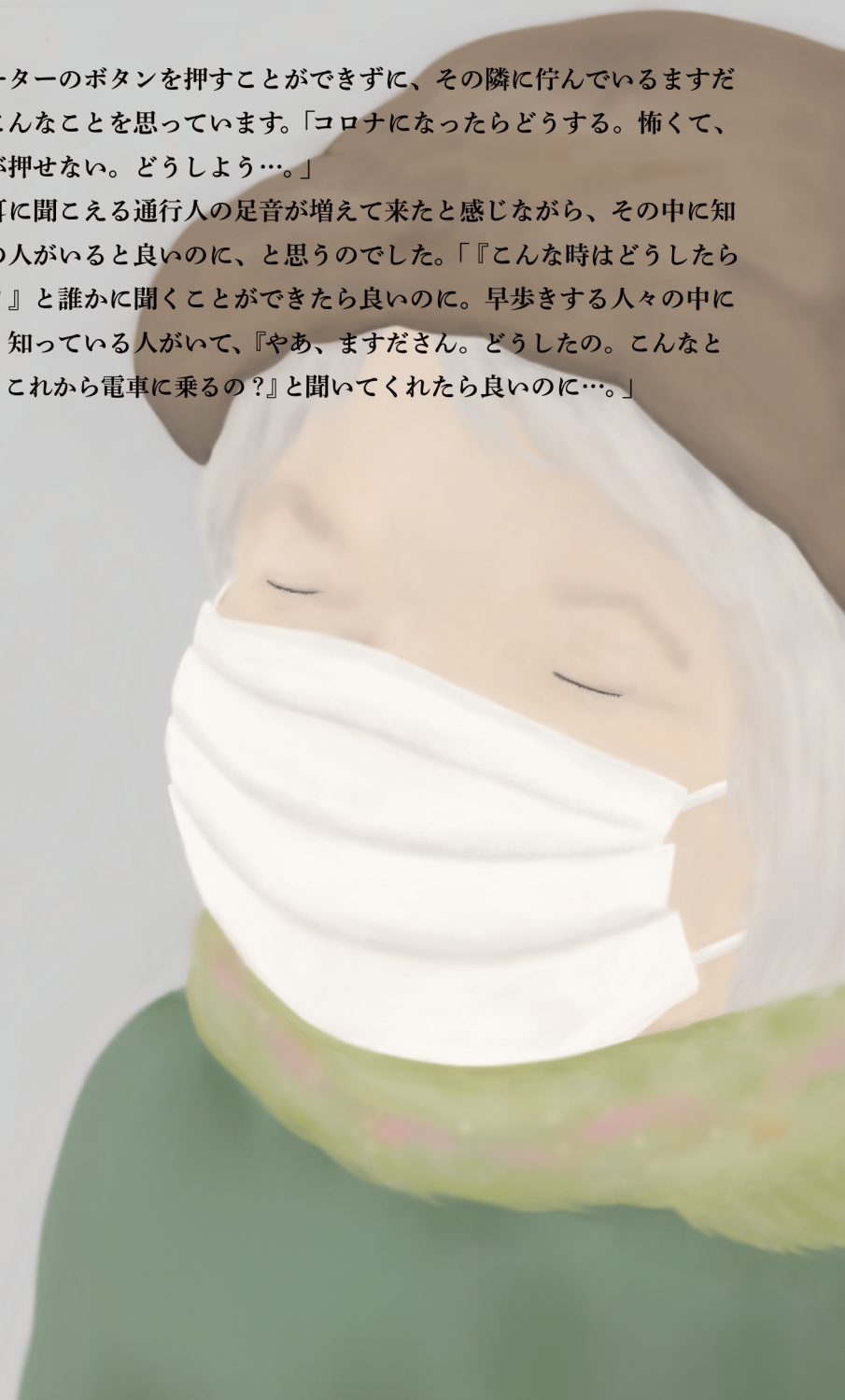


でも、エレベーターのボタンを押す勇気が中々出てこないのです。ますださんはエレベーターのボタンが付いている壁の位置を白杖で確かめた後は、エレベーターのドアに対して少し斜めに佇んで、こんなことを考えています。「他の人が触ったエレベーターのボタン、触っていいのかしら」ラジオとテレビで、電車の手すりや病院のドアノブなど複数の人が手に触れる物を消毒した方が良くと話していたことをふと思い出します。



エレベーターのボタンを押すことができずに、その隣に佇んでいるますださんはこんなことを思っています。「コロナになったらどうする。怖くて、ボタンが押せない。どうしよう…。」

そして耳に聞こえる通行人の足音が増えて来たと感じながら、その中に知り合いの人がいると良いのに、と思うのです。「『こんな時はどうしたら良いの?』と誰かに聞くことができたら良いのに。早歩きする人々の中に私がよく知っている人がいて、『やあ、ますださん。どうしたの。こんなところで。これから電車に乗るの?』と聞いてくれたら良いのに…。」



その時、エレベーターのドアが開く音が聞こえて来ました。
その後は **ドン ガラガラッ スタスタ** と、エレベーターの中から出て歩き出す人々の足音がします。



その人々の姿はぼんやりとした影となって、ますださんの目に映りました。影の輪郭と音を手がかりにして、ますださんは人々の姿を推測しています。



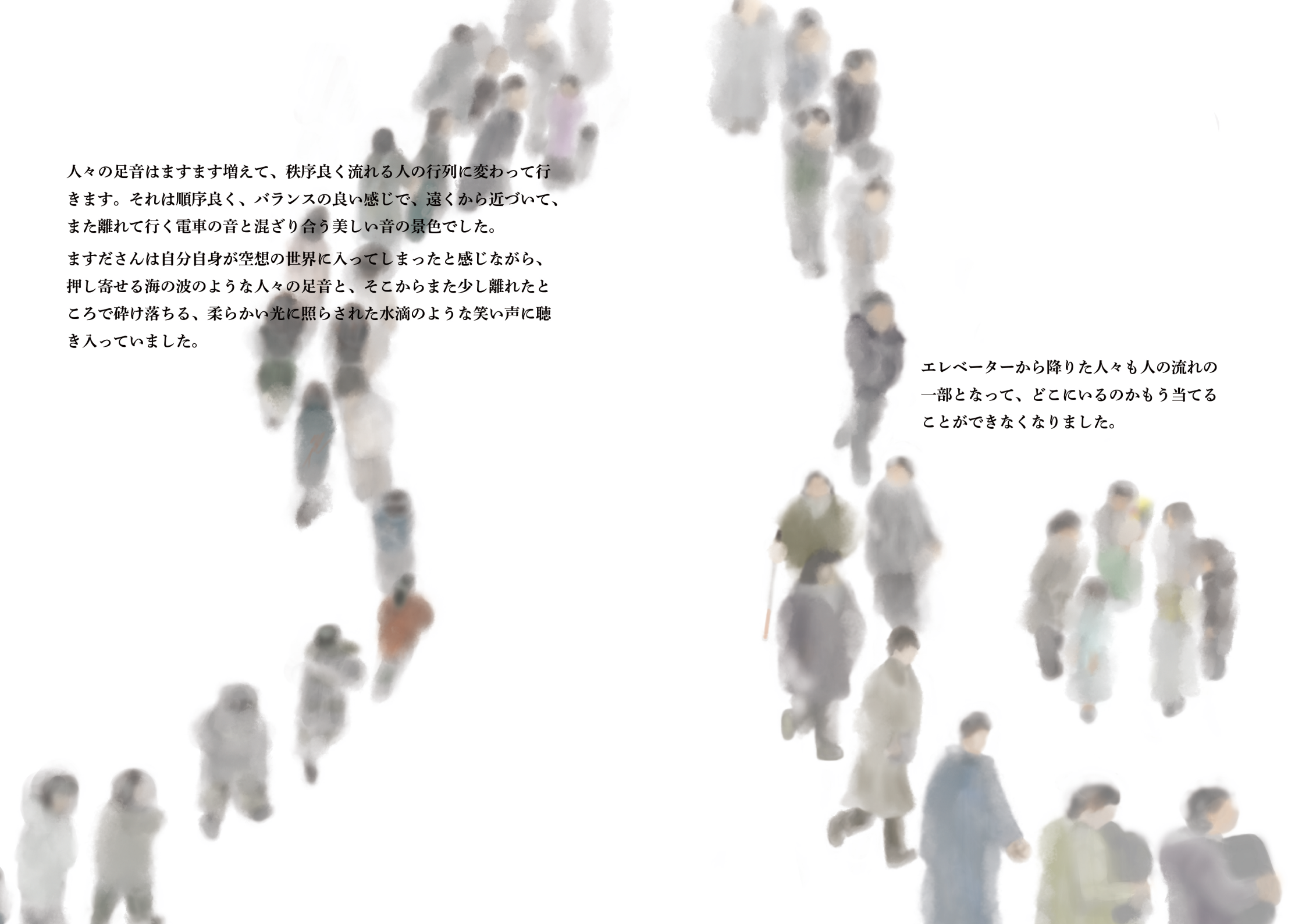
「会社員みたいな歩き方をする人と…、ベビーカーを押して歩く
髪が短い人…、そして子ども。

その後を降りるのは、視覚障害者なのかしら、杖を持っている
人がもう一人…。」





ますださんがエレベーターを降りて歩く人々の姿に関心を持って、その足音を追いかけているうちに、駅内を歩く他の人々の靴音に気がつきました。働く人々が、それぞれの道に向かって颯爽と歩いています。ますださんは、ホーム行きエレベーターに乗ることも忘れて、人々が織りなす煩雑な朝の音をただ聞いていました。先ほど駅に着いたばかりの時は、閑散としている雰囲気に関心を持っていましたが、他にも普段通りに生活している人がたくさんいることを感じて、ますださんは多に勇気づけられました。



人々の足音はますます増えて、秩序良く流れる人の行列に変わって行きます。それは順序良く、バランスの良い感じで、遠くから近づいて、また離れて行く電車の音と混ざり合う美しい音の景色でした。

ますださんは自分自身が空想の世界に入ってしまったと感じながら、押し寄せる海の波のような人々の足音と、そこからまた少し離れたところで碎け落ちる、柔らかい光に照らされた水滴のような笑い声に聴き入っていました。

エレベーターから降りた人々も人の流れの一部となって、どこにいるのかももう当てることができなくなりました。

しばらくして、ますださんは駅内が朝と同じく静まり返っていることに気づきます。たくさんの人々が駅の中を行き来する音が聞こえて来たのは、やはり自分自身の想像によるものだったと思いながら、ますださんは時間が過ぎて行っていることにちょっとした焦りを感じました。

そして、「そうだ私も急がなくては」と考えました。

エレベーターのボタンに触れることにはまだ躊躇しますが、とりあえず電車に乗らないと日が暮れて夜になっても買い物を済ませることができないと思ったのです。

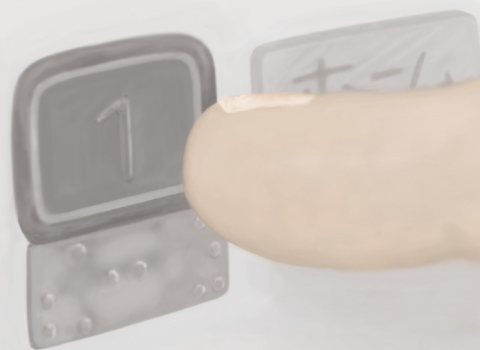
その時、ますださんよりも先にエレベーターのボタンを押してドアが開く音がして、エレベーターに乗る人がいました。

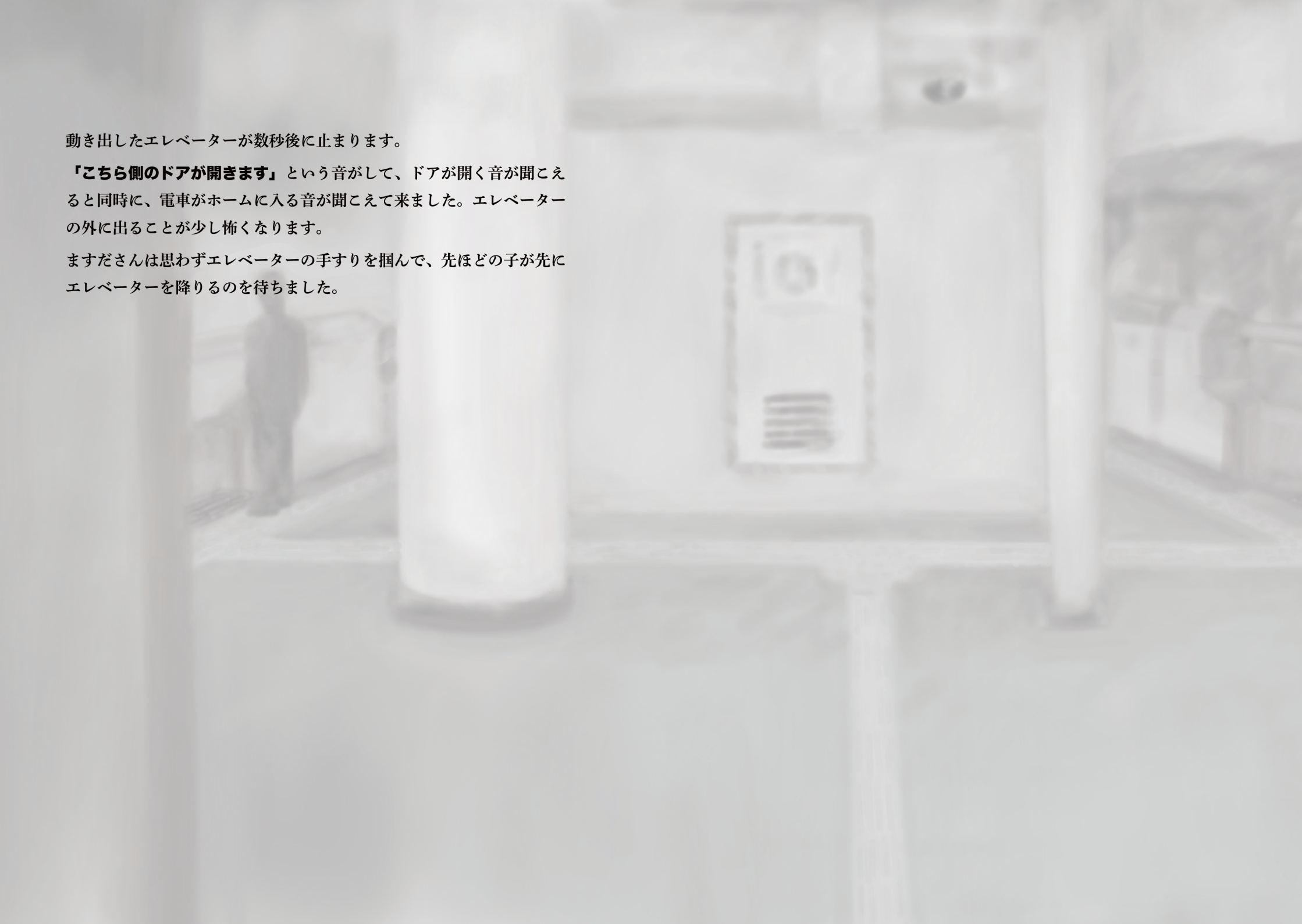


その軽やかな影の動きや、キーホルダーに付いているチャームの音からして女の子か、女の子みたいな男の子かもしれないと感じながら、ますださんはその子どもの後ろに続く形で1歩、2歩、3歩くらいの大きい歩幅でエレベーターのドアが閉じる前に、無事に乗り込むことができました。その後、「**ドアが閉まります**」という音がして、エレベーターのドアが閉じました。

ますださんは、「今一緒にエレベーターに乗っている人が、ボタンを押してくれたんだ!」と思いました。コロナに感染することが怖くて指先ひとつ差し出すことができず、躊躇してしまった自分自身のことが少し恥ずかしくなります。

ますださんは「今回は私があの人代わりにホーム行きのボタンを押そう」と思いました。ますださんより先にエレベーターに乗った幼い子どものような人も、動かずにその場に立ち尽くしています。ますださんがエレベーターのボタンがあるほうに右手を伸ばすと、冷たい「ホーム」の点字が刻まれています。ホーム行きのボタンを右手の人差し指で押したら、「**ホームに参ります**」という音が聞こえてきて、その後エレベーターが動き出しました。





動き出したエレベーターが数秒後に止まります。

「こちら側のドアが開きます」という音がして、ドアが開く音が聞こえると同時に、電車がホームに入る音が聞こえて来ました。エレベーターの外に出ることが少し怖くなります。

ますださんは思わずエレベーターの手すりを掴んで、先ほどの子が先にエレベーターを降りるのを待ちました。

エレベーターに乗っていた子がホームに向かって小走りする音が聞こえました。ますださんもエレベーターから降りて、点字ブロックを頼りに電車を乗り降りする場所まで歩きました。

そして電車を待っている間に涼しい風が吹いて来ると、ますださんは先ほどの緊張のせいで、自分自身が冷や汗をかいていたことに気がつきました。白杖を持っている右手と右腕の力が一瞬抜けてしまい、手の平から白杖を落としてしまいそうになります。ますださんは、ガイドヘルパーさんがいない外出に不便を感じました。



電車に乗ると、いつもと違って人々の話している声がほとんど聞こえて来ませんでした。人々が飛沫感染対策としてマスクを着用し、他の人と話すことを極力避けようとしているからです。ますださんにとっては、実際に電車に乗っている人の数が分かりにくく、人々の感情や、思っていることを知る方法がないため不安を感じました。寂寞とした電車の中はあらゆる感覚が麻痺されてしまいそうな感じもしました。

ますださんは、マスクをしているせいで息がしづらくなったりと感じながら、情報源として音の他にも重要な「匂い」について考えました。そして「パンと花の匂い」から始まる次の歌を電車が目的地に到着するまで歌い続けました。もちろん心の中で。匂いという言葉で完結する歌が次々と思いつき、その繰り返しをずっと考えていられそうな感じがありました。パンと花の匂い 靴についた土の匂い 冷たい地上の風を纏ったジャンパーの匂い 急停車する電車の中でふわっと広がるシャンプーの匂い…。泣く子どもをあやすパパとママの汗の匂い…。

春の外出自粛要請。人々が外出を控えてほとんど物音がしなかった電車を後にして、ますださんは、歩きながら先ほどのことを考え続けていました。少しだけぼうっとして。

改札を出て暖かい広場に足を踏み出した瞬間、滑ってべったりと座り込んでしまったのです。



ぽつぽつといつの間にか雨が降っています。
エレベーターから傘を持って降りる人がいたことを思い出しました。
ますださんは触読式腕時計をした左手を空に向けてぱかっ
とプラスチック製のカバーを開けました。

そしてますださんは、
人差し指を使って時計の針をズズズッとずらしました。
コロナ禍が早く明けたら良いのになと、時間を先送りにしたいと思うの
でしょうか。



その時、ますださーんと大声で呼びながら、走ってくる人たちがいました。ますださんが普段通っている福祉センターのボランティアの人たちです。



この日は外出を控える人が多かったのですが、悪いことばかりではなく、そのお陰で知人の声がますださんの耳元まで鮮明に、よく伝わって来ました。ますださんは、大好きな人々の声が聞こえて来るとどうしてなのか嬉しい心の内をそっと隠しておきたくなくて、「痛ったあ〜」と言いながら膝の上に手の平をそっと乗せました。



あとがき

この物語は、2020年度から約3年間の間、世界的に感染が拡大し数多くの人々の命と日常生活に影響を及ぼした新型コロナウイルスのコロナ禍の中で、視覚障害を持つ障害者の方々がどんなことを感じて、経験されていたかといったことに関心を持ったことを切っ掛けに制作されました。お話を書くために視覚障害者の方々が利用する障害福祉施設を見学し、職員の方々からコロナ禍の影響下で実施されたコロナ感染対策と感染症が流行り出した時に視覚障害を持つ方々の日常生活に生じた不便についての話を聞かせていただきました。コロナ禍の視覚障害者の問題について直接感じたことや見聞きしたことを共有していただいた神奈川県ライトセンターの皆さんに深く感謝いたします。この絵本は障害者の方々が感じたことを、物語をとおして表現し、障害者の問題を伝えることの力添えになりたいという思いで制作しました。2023年5月に新型コロナウイルスは日本の感染症法上でインフルエンザと同じ5類に移行されることになり、それから一ヶ月が経過した2023年6月現在は、「アフターコロナ」という文言を目にすることが増えて高齢者が利用する医療施設と障害福祉施設における制限も緩和されつつあります。絵本を手にする方々にとって障害の当事者とその支援者に対する印象を新たにする絵と文章になっていましたら何よりの幸せです。

Yewon KIM キム イェオン
www.yewonworks.com

「ますださん」

Yewon KIM

発行日

2023年6月30日

※一部のイラストレーションを修正し、2023年8月に再発行しました。

© 2023 Yewon KIM